

世界大恐慌とフアンシズムを体験

昨年はドラッカー生誕100周年という節目の年。日本でも、書店などで多くのフェアが開催され、テレビで特集番組も組まれた。ブームは今年に入っても継続し、むしろその勢いを増している。

ドラッカーのほとんどの著作を翻訳し、ドラッカー学会代表として、全国で講演活動を続ける上田惇生氏はこう分析する。

「講演の参加者やドラッカー本の購買者は、20〜30代の若いビジネスマンも多い。彼らの声を聞くと、リーマンショック後、企業のある方や働くという行為そのものに対し、疑問を抱えているように感じます。

先行きが見えない、これまでのビジネスモデルが通用しない。そんな不安を打開する拠り所をドラッカーに求めているのでしょうか」

経営学者として著名なドラッカーだが、その教えの中に、会社経営や人心掌握

の具体的なノウハウがあるわけではない。

「ドラッカーの関心の中心にあるのは、人々が幸せを得るための会社や産業社会です。そこが他の経営学者と決定的に異なる点です」

(上田氏)

ピーター・F・ドラッカーは1909年、オーストリアのウィーンで生まれた。最初の勤め先は

ドイツ・フランクフルトの証券会社。だが、世界大恐慌の影響で倒産の憂き目にあってしまう。

その後、ドラッカーは新聞記者を務めるが、その職もすぐに追われた。当時、台頭しつつあったヒトラーにインタビュールし、フアンシズムの起源に迫るリポートなどを発表し



好調な売り上げが続く

ためだった。

ナチスに目をつけられたことをきっかけにアメリカに移住。結果、経営学者の道を歩むことになる。

世界大恐慌とフアンシズム。ドラッカーが経済活動のなかに「幸せ」を追求する姿勢には、これら2つの原体験があったと上田氏はみる。「アメリカの学者というと市場原理主義の印象が強い。だが、ドラッカーの教えに、拝金的な価値観は皆無で、

逆に哲学や道徳といったものを重視する。それが、ビジネス活動に「倫理」を求める日本人に、深く浸透する理由ともなっています」

事実、彼を支持する経営者は、アメリカよりも日本のほうが多いのだという。

『もしドラ』主人公は実在アイドル

昨年12月に発売されるや、ブームの火付け役となったのが『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカー

の「マネジメント」を読んだら』(ダイヤモンド社刊)である。

名著『マネジメント』のエッセンスを、高校野球部が甲子園を目指す青春小説のなかから学べるとあって、「ドラッカー初心者」の間で大反響を呼んでいる(現在部数は51万部)。

著者の岩崎夏海氏は、大卒卒業後、作詞家の秋元康氏に師事し、現在はテレビ番組を舞台に活躍する放送作家だ。

「著作の紙幅の多さや、作品数から敬遠する方もいますが、読んでみるとかき難しいことを説いているわけではありません」

岩崎氏は、ドラッカー流

マネジメントの要諦はマーケティング、フィードバック、イノベーションにあると語る。

「業績が好調な企業も、その背景には、この3つの要素がバランスよく作用していることが多い」

ここで岩崎氏が例としてあげたのは、自身もプロデュースに携わったアイドルユニット「AKB48」の大ブレイクである。

「企業は、何を売りたいかではなく、顧客が何を求めているか」を知れ——これがドラッカーの教えです。AKB48プロジェクトも、顧客のニーズに 대응するために発足したユニットです。

結成当時は、アイドルが身近な存在になっていた頃。秋葉原のコアなファンのかたに、「アイドルとダイレクトに交流したい」という